

①

長いあいだ、ごくありふれた個人性は——下層民の個人性や一般大衆の個人性は——、記述の水準以下にとどまってきた。注目され、観察され、詳しく物語られて、日々絶えまなく書き留められること、これは、一つの特権であった。一人の人物の年代記、その生涯の物語、その生涯の流れにそって書かれる歴史記述は、その人物の強権をほめたたえる儀礼の一部になっていた。ところが、規律的手法〔新たな権力の手法〕の数々は、この関係をひっくり返し、記述可能な個人性の水準を引き下ろして、個人性の記述を管理の手段および支配の方法とする。個人性の記述は、もはや、未来の記憶のための記念碑（モノキュメント）ではなく、利用可能な資料（ドキュメント）となるのだ。そしてこの新たな記述可能性は、規律的締めつけが嚴重であればあるほど、いっそう顕著なものとなる。すなわち、子供や病者や狂人や受刑者〔権力による嚴重な締めつけを被る人々〕が、十八世紀以降ますます容易に、規律的メカニズムに備わる一つの傾向に従って、個人別の記述と生活史的な物語の対象になっていくということだ。現実の生存をそのように書き留めること、それはもはや、英雄化の手続きではなく、客体化および従属化の手續きとして機能するのである。精神病者もしくは犯罪者たちの生に関する綿密な調査は、国王の年代記や有名な大盗賊の冒険物語と同様、書き留めるといふ行為のある種の政治的機能に属するものであるが、しかしその調査は、権力の全く別の技術のなかで行われるのである。

個々人間の差異を儀礼的かつ「科学的」に決定するものとしての試験、一人ひとりを各々に固有の特異性にピンで留めるものとしての試験は（身分や家柄や特権や職能が華々しいしるしとともに明示される場としての儀式とは異なり）、権力の新たな方式の出現を見事に示している。そうした権力の新たな方式においては、一人ひとりが自分に固有の個人性を身分として受け取り、その身分に従って諸々の特性、尺度、逸脱、「評点」に結びつけられて、一つの「事例」となるのである。

結局、試験は、個人を権力の効果および客体として、知の効果および客体として構成する手続きの中心にある。（……）試験とともに、規律が儀礼化される。この規律は、ひとで言うなら、個々人間の差異と大きくかかわりを持つ権力の方式として特徴づけられるものなのである。

②

要するに、権力を行使する人々の華々しい輝きによって自らを表明する権力が、権力を適用される側の人々を狡猾なやり方で客体化する権力によって取って代わられるということであり、君主権の豪奢なしるしが誇示されるよりもむしろ、権力を適用される側の人々に関する知が作り上げられるということである。

『監獄の誕生』田村俣訳（白水社）一部改訳